

第6室 書跡

「一法隆寺献物帳と古今目録抄一」

N-5 法隆寺献物帳（ほうりゅうじけんもつちょう）

天平勝宝8年（756）5月2日に崩御した聖武天皇の冥福を祈り、同年7月8日に、皇女の孝謙天皇が父帝の遺愛品などを金光明寺（東大寺）以下18カ寺に献納しました。この献物帳は、その時の法隆寺への献納物の目録です。縹（はなだ）色の麻紙に、中国・唐風の楷書で書かれています。末尾の藤原仲麻呂ら5人の署名はいずれも自筆です。本紙全体には、18顆の「天皇御璽」印が捺されています。

N-18 古今目録抄（ここんもくろくしょう）

法隆寺の寺誌や聖徳太子伝に関する秘伝を記したもので、別名「聖徳太子伝私記（しょうとくたいしでんしき）」ともいいます。13世紀前半に法隆寺の僧侶、顕真（けんしん）が上下2巻にまとめました。上巻では師の隆詮（りゅうせん）から伝授された法隆寺や聖徳太子伝の秘伝を記し、下巻では聖徳太子の舎人（とねり）の調使麻呂（ちょうしまろ）に関する伝記と自らが調使麻呂直系の子孫であることを述べています。なお、随所に顕真自身による加筆訂正の跡があります。

N-19 古今目録抄写（ここんもくろくしょううつし）

「古今目録抄」を室町時代に写したものですが、記事の量や順序には大きな違いが認められます。現在では、上中下3巻に分かれています。

第6室 染織

「一玉帯残欠と様々な技法の染織品一」

今回の染織は、聖武天皇の遺品と伝えられる玉帯残欠（ぎょくたいざんけつ）を中心として、組紐や綾・平絹・氈（せん）といったさまざまな技法の染織品を展示します。織りや組紐の技術、染め色の違いなど、古代染織の豊かな世界をご覧くださいと思います。

N-49 玉帯残欠（ぎょくたいざんけつ）

[重要文化財] 奈良時代・8世紀

多彩な色糸を濃い色から淡い色へとぼかして配列し、襷文を組紐で表わした帯。聖武天皇の玉帯として伝来しました。注目すべきは、さまざまな色のガラス玉と真珠玉を直接糸に通しながら組みあげている点です。これは正倉院宝物にもみられない大変珍しいもので、高貴な人物が身に着けたと考えられます。

N-50-1 山形文組紐幡頭（やまがたもんくみひもばんとう）

[重要文化財] 飛鳥～奈良時代・7～8世紀

仏教儀礼で用いる幡（ばん）という旗の残欠です。上部の幡頭（ばんとう）は組紐でできしており、数々の色糸を用いて山形文を表わしています。同様の文様は、聖徳太子の肖像画として有名な御物の「聖徳太子二王子像」における太子の腰帯にも認められます。

I-336-3a 茶地蝶文描繪平絹「東院」銘（ちゃじちょうもんかきえへいけん どういんめい）

奈良時代・8世紀

茶地平絹に墨の描繪を施した残欠。翅（はね）を広げた蝶の姿を真上と横から表わしています。「東院」（夢殿で有名な法隆寺の西院伽藍に隣接する東院伽藍のこと）という墨書があり、中央の折れ跡から、もとは帯のような形状であったことが分かります。

I-336-4 黄地小円花文金銀摺繪羅（きじしょうえんかもんきんぎんすりえら）

奈良時代・8世紀

経糸を複雑に絡めた隙間に緯糸を通し、文様を織り表わす羅（ら）という技法を用い、細かな斜め格子状の襷文（たすきもん）を表わします。そこに金泥・銀泥を摺り、六弁の小円

花文を表わしています。残欠ながら、かわいらしい印象を伝える作品です。

I-336-93 縞地竜文刺繡（しまじりゅうもんししゅう）

飛鳥時代・7世紀

色系を用いて平絹の台裂を横段に色分けし、竜の文様を返し繡で表わしています。細身でありつつ、比較的体が短く竜が四本足で立つ姿は、古墳時代の金工作品にみられる文様に類似しており、有名な奈良・中宮寺所蔵の国宝「天寿国繡帳」とならんで、わが国でも最古級の作品と考えられます。

I-336-102 繡仏裂（しゅうぶつぎれ）

飛鳥時代・7世紀

経糸・緯糸ともに強い撚りを掛けて織られた緞（しじら）を下地として、天人と宝珠文を刺繡で表わしています。両面刺繡の技法が用いられており、もとは献納宝物中の仏教儀礼で用いられた灌頂幡（かんじょうばん）と呼ばれる旗、または金銅小幡に付属する幡足（ばんそく）であったと考えられます。

I-336-108 白地花文氈（しろじはなもんせん）

奈良時代・8世紀

氈（せん）とは羊毛を圧縮して作られた敷物のことで、現代のフェルトにあたります。本作は白地の氈に藍と縹、赤、淡赤に染めた色氈を嵌め込んで花の文様が表わされています。いわゆる花氈と呼ばれるもので、正倉院には幾種類もの作例が伝えられていますが、法隆寺伝来の花氈は本作のみであり、とても貴重な作例です。

N-319-14 平絹・綾幡足残欠（へいけん・あやばんそくざんけつ）

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

幡の中央部に位置する幡身（ばんしん）の下端と4条の幡足をのこした残欠です。1条のみ連珠円文をあらわした赤紫地綾が用いられていますが、他は各色の平絹で仕立てられています。基本的には五色を意識したものと考えられ、非常に鮮やかな幡の姿を想像することができます。

N-319-34 平絹幡残欠（へいけんばんざんけつ）

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

幡の上部にあたる幡頭、および幡身の下端と幡足の付け根が残された残欠です。黄色い幡はとくに「命過幡」(みょうかばん・めいかばん)と呼ばれ、死者の魂が無事に成仏するよう追善の供養として用いられました。

綾の幡足

N-319-47-2 黄地山形文綾幡足残欠 (きじやまがたもんあやばんそくざんけつ)

N-319-115 黄地変り鬘文綾幡足残欠 (きじかわいしだたみもんあやばんそくざんけつ)

N-319-117-1 赤地鬘文綾幡足残欠 (あかじいしだたみもんあやばんそくざんけつ)

すべて飛鳥～奈良時代・7～8世紀

法隆寺に伝来した幡には綾という絹織物を用いた例が多くみられます。綾とは経糸、もしくは緯糸が他方の織糸を一定の法則で連続的にまたぐことで、文様を表わしたものです。法隆寺の綾は時代が進むにしたがって、山形文や入子菱文といった幾何学的な文様から、葡萄唐草文や鳳凰文といった具象的な文様に変化しており、またこの変化に従って文様も大柄になる傾向があります。単色の織物であるため、一見無地のようですが、見る角度を変えると文様が浮かび上がってきますので、視点を動かしながらご覧ください。

平絹の幡足

N-319-52-2 淡縹地平絹幡足残欠 (うすはなだじへいけんばんそくざんけつ)

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

平絹は経糸・緯糸が一本ずつ順番に交差した最も単純な織物で、幡足にも多く使用されました。染め色としては、死者の追善供養を目的として作られた「命過幡」(みょうかばん・めいかばん)が黄色一色であるのに対し、その他の仏事において堂内を荘厳した幡にはさまざまな色が用いられています。紺・赤・黄・緑・紫の五色がその基本であり、染め方の濃淡によってさまざまな表情を見せています。一見単純そうに見えて奥深い染物の世界を教えてくれる作例と言えるでしょう。

N-319-123 淡茶地目結文纒纒平絹残欠 (うすちゃじめゆいもんこうけちへいけんざんけつ)

奈良時代・8世紀

纒纒(こうけち)とは絞り染めを指します。小さくつまんで糸でくくって染めると、糸を巻いた部分は染め残り、丸みを帯びた菱文があらわれます。作品をみると、巻いたときの糸

の痕が一重、二重と差があり、また形について菱型もあれば、楕円のようにややつぶれているものもあります。手で一つ一つ巻くため、まったく同じ形にはなりません。